

シリーズ 「補綴装置および歯の延命のために」 Part 3 根尖部病変の診断・治療・予後

峯 篤史

Diagnosis, treatment and prognosis of apical periodontitis

Atsushi Mine, DDS, PhD

補綴治療計画の立案において根尖部病変を無視することはできない。補綴前治療として歯内療法を行うかまたは抜歯を行うのかの判断基準、歯内療法後の補綴治療での留意点についての最新情報の習得は補綴治療のアウトカム向上にとって不可欠なものである。シリーズ「補綴装置および歯の延命のために」のPart 3として、この根尖部病変にフォーカスをあてた。

歯内療法はここ数年で多くの進歩を遂げており、新種のファイルや充填材の開発によってその治療効果は飛躍的に向上している。さらにマイクロスコープやCBCTの導入で、根尖部病変に対してより確実な診断と処置が行えるようになり、かつては保存困難と考えられていた歯を保存することが可能となっている。また、根尖部病変は根管内からアプローチして感染源を除去することが第一選択であるが、根管孔外やセメント質に感染がおよんでいる場合は外科的歯内療法が適応となる。この外科的歯内療法により良好な治療経過が得られ、補綴装置や歯の喪失を免れることも少なくない。

本企画では、根尖部病変に対する【診断】【治療】【予後】のそれぞれを観点として、歯内療法専門家にその現状と未来を考察して頂いた。今、根管治療法に疑問を感じていない先生方にも是非御一読頂きたい。

まず、澤田則宏先生には多くの画像を掲載して頂くとともに、適切な検査による的確な臨床判断について

記して頂いた。本文における「X線透過像だけを理由に再治療を繰り返すことがあってはならない。」「二方向からのエックス線写真撮影で読影できる部分も少なくなく、被爆量を考慮すると術前にすべての症例でCBCTを撮影することは正当化できない。」との表現から、術前画像診断に対するフィロソフィーを感じることができる。また視野の広さが際立つClinical Decision Makingでは、口腔顔面痛専門医との連携を考えるべき症例も示されている。

続いて吉川剛正先生には、確実性と予知性の高い根管治療をテーマとして執筆して頂いた。根管の形成、洗浄、貼薬や充填といった基本的な手技の最新の見識は、それを裏付ける根拠も明確に提示されており、次世代の根管治療法の到来が予感される。さらに、Endodontic Microsurgeryをはじめとした外科的歯内療法についても詳しく記述されており、進歩した歯内療法を学ぶことができる。

田中利典先生には仮封方法、補綴処置における根管形成、根管形成後のプロビジョナルレストレーションの詳しいデータと歯内療法専門医の見解を示して頂いた。まとめの言葉「我々の行う治療のひとつひとつが患者利益に結びつき、歯科医師と患者、補綴専門医と歯内療法専門医との間でさらなる信頼関係の構築が生まれることを期待している。」に強く共感する者は、私だけではないはずである。

題名および執筆者

「再根管治療における Clinical decision making」

澤田則宏 先生

「根尖部病変の治療」

吉川剛正 先生

「根尖部病変の予後とその後の補綴治療」

田中利典 先生